

音楽科授業における箏の学習法の研究

～効果的な演奏体験のために～

伊 野 義 博*

目 次

はじめに

I 研究の目的

II 研究の概要

1 手順と方法

2 研究の実際

1) 授業実施日

2) 授業時間

3) 授業の基本構造と各グループの指導の相違

4) 授業の詳細

III 結果と考察

1 唱歌^{しょうが}学習の有効性と課題

1) 結果

2) 有効性

3) 課題

2 楽譜の位置づけ

1) 五線譜による学習

2) 絃名譜と五線譜による学習

3) 楽譜の効果

3 異なる学習法の持つ意味

4 演奏上の技術的な課題

1) 演奏上の困難点

2) 今後の学習指導への示唆

5 学習法の改善

1) 改善点

2) 授業構造の再提示

おわりに

*新潟大学教育学部音楽科教育研究室

はじめに

音楽科の授業において箏を用いて学習する事例が多く報告されるようになってきた。箏は柱の移動により様々な調弦ができ、手軽で初心者でも音が出しやすいという利点があり、日本の伝統的な音楽を体験的に理解するには貴重な楽器となっている。

一方、日本の学校音楽教育では、学習者は基本的に西洋音楽のシステムにより、五線譜を媒体とした教育を施されている。従って箏の体験学習を試みる場合、指導者は唱歌を唱え、曲を丸ごと練習していく日本の伝統的な学習法との対峙をせまられる。加えて年間の計画の中で時間的にそう多くの授業数を確保できない実情もある。

学校の音楽授業において、限られた時間内で初心者に箏曲の演奏体験をさせる際、どのような学習法がより効果的なのだろうか。また、技術面での課題はいかなるものであろうか。

本研究は、五線譜・階名唱を中心とした学習法と絃名譜・唱歌を中心とした学習法を試みる中で、箏演奏の技術面の課題を考慮しながら、学習者の反応を観察、比較、分析することにより、音楽科の授業における箏の演奏体験について具体的な学習法について考察するものである。

I 研究の目的

箏学習に関する本研究の目的は以下の4点である。

- 1 唱歌学習の有効性と課題：箏学習に際して、伝統的に用いられている唱歌を使用し、その学習の有効性と課題とを明らかにする。
- 2 楽譜の位置付け：五線譜・階名唱による学習法と絃名譜・唱歌による学習法を実践する中で各々の楽譜の役割を明確にし、箏学習における楽譜使用の位置付けを明確にする。
- 3 演奏上の技術的な課題：短時間での箏学習における演奏上の課題を観察し、指導のポイントを探る。
- 4 以上の研究をもとに箏の学習法について再

考察する。

II 研究の概要

1 手順と方法

1) 手順

次の手順により箏の学習を行う。

① 使用教材と範囲

- ・〈さくら〉（日本古謡）
- ・〈六段の調〉（八橋検校）の初段、冒頭から3フレーズ（21拍）
- ・指導用ビデオ（初段演奏、唱歌つき演奏のもの）

② 使用楽譜の種類

〈さくら〉（日本古謡）

楽譜①：絃名+唱歌が記入されているもの。縦書き譜

楽譜②：五線譜が記入されているもの

〈六段の調（初段）〉

楽譜1：絃名+唱歌が記入されているもの。縦書き譜……資料1

楽譜2：五線譜+絃名が記入されているもの。……資料2

楽譜3：五線譜+唱歌が記入されているもの。……資料3

③ 使用楽器

箏12面：平調子に調絃、第一絃をDに合わせる。絃の場所がわかりやすいように、龍角の脇に絃名を書いた紙を貼っておく。

④ 学習者

以下の4グループに分ける。新潟大学教育学部2～3年次の学生である。

グループ名・対象学生	人数	箏経験者 (数回も含む)
Aグループ 小学校教員養成課程	13人	(1人)
Bグループ 小学校教員養成課程	18人	(1人)
Cグループ 小学校教員養成課程	8人	(1人)

Dグループ

中学校教員養成課程(音楽)及び

特別教科(音楽)教員養成課程 18人 (4人)

計 57人 (7人)

⑤ 条件設定

4つのグループに対して以下の条件で指導する。

グループ名 旋律の認識方法 学習方法

(使用楽譜番号)

Aグループ

(① 1) 唱歌 唱歌による学習

Bグループ

(② 2) 階名 五線譜による学習

Cグループ

(①②123)唱歌及び階名 双方を学習し選択

Dグループ

(①②123)唱歌及び階名 双方を学習し選択

2) 方法

学習者へのアンケート(資料4①～③)の分析及び授業者の観察による。

2 研究の実際

1) 実施口

Aグループ:1994年11月10日(木)

Bグループ:1994年11月10日(木)

Cグループ:1994年11月11日(金)

Dグループ:1994年11月11日(金)

2) 授業時間

90分(実際の指導は70分)

3) 授業の基本構造と各グループの指導の相違

(唱歌・階名及び楽譜の使用箇所)

基 本 構 造	A グループ	B グループ	C、D グループ
箏 に さ わ り 親 し む			
調 絃 法 の 確 認			
基本的な奏の学習	唱歌の使用	階名の使用	唱歌・階名の混合使用
平易な曲〈さくら〉の練習	楽譜①	楽譜②	楽譜①楽譜② ↓
〈六段の調〉初段の鑑賞	楽譜 1	楽譜 2	楽譜 1 唱歌の使用
初段21拍までの旋律暗唱	↓	↓	↓
コロリンの練習	↓	↓	↓
かき爪(シャン)と 割り爪(シャシャ)の練習	↓	↓	↓
押し手、引き色の練習	↓	↓	↓
	↓	↓	楽譜 2 階名の使用 楽譜 3 ↓
	↓	↓	学習法(階名・唱歌、楽譜)の選択
総 合 練 習			(〈六段の調〉初段)

4) 授業の詳細……資料5

Ⅲ 結果と考察

1 唱歌学習の有効性と課題

(唱歌を使用しなかったBグループを除く
A、C、D、計39名のアンケートから)

1) 結果

質問:「唱歌は役に立ちましたか、立ちませんでしたか。」

グループ名	A	C	D	計	(%)
役にたった	10	6	15	31	(79)
役に立たなかった	2	2	2	6	(15)
その他	0	0	1	1	(3)
無答	1	0	0	1	(3)
計	13	8	18	39	(100)

質問:「その理由を詳しく書いて下さい。」

(以下代表的意見を抽出)

①役に立った。(31名、79%)

ア、奏法がわかる。

- ・コロリンとかが弾きやすい。
- ・シャンとかシャシャとかが、音の出し方に似ていて覚えやすかったから。
- ・唱歌と技法が一致していることに気付くとおもしろい。
- ・同じ言葉の所は、同じ音型なんだなというのがなんとなくわかる。
- ・「チィ」の所がわかりやすかった。

イ、使用する指が推測できる。

- ・ト、テ、チなどの頭文字の番号を覚えることによって他の部分でもあわてなかった。

ウ、リズムがつかみやすい。

- ・速さ(テンポ)をとるのに助かった。
- ・曲のリズムを唱歌で把握することができた。

エ、メロディやフレーズがわかりやすい。

- ・フレーズがわかりやすい。
- ・曲の流れを覚えるのに役だったと思う。

オ、覚えやすい。

- ・頭で曲を覚えるのにドレミよりも覚えやすかったから。

カ、記憶が定着する。

- ・もし、学校にあれば弾いてあげられるし、どこかでこの曲を聞いた時に思い出すから。

- ・感覚的に次の音がイメージできる。

キ、歌いながら弾ける。

- ・頭の中で歌っていると感覚的に次の音がイメージできる。

ク、雰囲気がつかめる。

- ・箏の音色そのものがテンションに合っているから。

- ・一番しっくりくるし、歌だなあと思えるので。

②役に立たなかった。(6名、15%)

- ・頭の中は指か何かでいっぱいだった。
- ・言葉が、何を表すかつかみきれなかった。
- ・音(絃)との関係づけを覚えられなかったから。
- ・音そのものが頭の中にあるから。

③その他(1名、3%)

- ・シャとコロリンは役にたったけどテンとかトンは役に立たなかった。

2) 有効性

唱歌を使用して学習した学生の約8割は、階名唱や五線譜の使用の有無にかかわらず唱歌が役に立ったことを実感している。

その理由の第1は、唱歌が奏法を示していることがあげられる。中でもコロリンとかき爪(シャン)・わり爪(シャシャ)に対する有効性を述べた感想が多かった。また、あと押しの唱歌(チィ)¹⁾についての指摘がある。これらの唱歌はその発音そのものが奏法に直結しているものである。したがって唱歌を歌うことによりそのまま定型化された奏法のパターンへと導かれるわけである。

また、「チツテは親指、トは主として中指、人さし指」²⁾に用いられることから、トンやテンなどと発音することにより、使用する指が予想できるものと思われる。

第2に、唱歌はリズム認識やメロディ・フレーズの把握が容易にできることもあげられた。各音の音価は例えば「コーロリン」に見られるような付点のリズムで特定される。付

加リズムの構成観や歌うことによって生ずるテンポの緩急・伸縮なども理解されるのであろう。しかも唱歌の働きは、旋律の流れを示すだけではなく、「テントンシャン」のように一つのまとまりを表わしており、フレーズとしての捕らえ方が強く意識されている。「フレージングがわかりやすい」という感想はここから生ずるのであろう。

第3に記憶の定着があげられる。定型化された旋律型やその組み合わせによるフレーズの構成が言葉と共に記憶されることにより、「ドレミよりも覚えやすい」と感じられ、「どこかでこの曲をきいた時にまた思い出す」ことができる自信を生む。従って歌いながらの演奏も容易になり、そのことにより「感覚的に次の音のイメージができる」ようになり、さらに練習の効果を生むことになるのではないだろうか。

最後に、唱歌の響きを持つ箏の音色との一体感があげられる。テントンシャンやコロリンという言葉の持つ響きが、階名唱とはまったく異なった日本的な雰囲気醸し出し、イメージに合った音の世界が繰り広げられることになる。

3) 課題

アンケートの回答の中で、「役に立たなかった」「その他」の項目からは、唱歌学習における留意点や課題が示唆される。

まず本実践における時間的な問題が指摘される。短時間で、しかも初段のごく一部だけの取り組みでは、充分唱歌を暗唱し消化することは不可能であった。「頭の中は指が何かでいっぱいだった。」「言葉が何をあらわすかつかみきれなかった。」という反省は、唱歌による学習が繰り返し時間をかけ、「覚える」必要があることを物語っている。

第2は、唱歌は演奏法のすべてを伝達するわけではなく、そのあいまいさが学習者を感じさせる結果となっていることである。

それは、唱歌が各々の絃を区別するわけではないこと。すなわち「どの絃にはどうい

う唱歌をあてるということはない」また「唱歌そのものによって音（音の高さ）を区別することができない」³⁾ことにある。「シャとコロリンは役にたったけどテンとかトンは役に立たなかった。」という感想に表れるように、唱歌そのものからは弾く絃名を予想できない。特にテ（ン）、ト（ン）にいたっては両者の音高に関しての規則性がないため、この点に関して初心者にとっては意味のある情報とはなり得ていない。「言葉が、何をあらわすかつかみきれなかった」学生に対して、唱歌を唱えるだけでなく、その持つ機能に関して、何等かの補充説明をし理解させることが必要であろう。

第3に、旋律やリズムを唱歌と関係なく覚えてしまっている場合である。これは例えば既知の曲〈さくら〉をつまみ弾きするのと同様だが、この場合奏者はコロリンなど手法を示す情報はないわけで、学習者は心の中にあるに音の動きそのものを頼りに演奏することになる。彼等にとって唱歌の学習は旋律記憶以外には役立っていないわけである。唱歌の使用が無意味なのではなく、唱歌の持つ他の情報機能をわかりやすく説明することが重要であろう。

2 楽譜の位置付け

1) 五線譜による授業：Bグループ〔五線譜（五線譜＋絃名）〕の授業から

①結果

五線譜による授業を行ったBグループ（18名）が、演奏上頼ったのは次の項目である。

質問：「箏を弾く時に頼りにしたことは何ですか。最も頼りにしたものを次から選びなさい。複数ある人は順位をつけなさい。」

(人)

	1 位	2 位	3 位	4 位
階名唱	6	3	1	0
絃番号	12	4	0	0
音符	0	3	4	1
指番号	0	0	1	0
その他	0	0	0	2

②考察

五線譜による学習者は、主体として絃の番号と階名唱を最も頼りにして練習をしていることが言える。中でも絃の番号が最も大切な情報であり、音程や音価を示した音符（五線譜）そのものは、ここではさほど必要なものとはなっていない。学習者はすでに階名唱により旋律を暗唱しているわけであり、彼等にとっては、その階名唱をもとに〈まずどこを弾くか（絃番号）〉ということが最大関心事

などであろう。

また、2 番目に階名唱があげられているが、これも旋律の動きを確認するというより絃番号を知ることと深く関係しているものと思われる。すなわち、ミは一・五・十、でありラは二・七・十二であるという意味においてである。

これは、B グループの構成員が、小学校教員養成課程の学生であり、五線譜にあまり親しみがなかったためであろう。仮に、学習者が五線譜を有効に活用できる能力、すなわち読譜力を持った場合は異なる結果となることが予想される。このことに関してはD グループの結果から後程考察しよう。

2) 絃名譜と五線譜: C、D グループの授業から

①結果

C・D グループには用意したすべての楽譜（1～3）を与えた。楽譜の依存に関するアンケート結果は次の通りである。

質問「今日の学習で最終的にあなたが使用した楽譜の番号を一つ選択しなさい。」

	C グループ	D グループ
楽譜 1（絃名+唱歌）	7	9
楽譜 2（五線譜+絃名）	1	6
楽譜 3（五線譜+唱歌）	0	1
使用せず	0	2

質問「その理由をくわしく説明しなさい。」(以下代表的意見を抽出)

C グループ（小学校教員養成課程）	D グループ（音楽科）
<p><u>楽譜 1 を選択（7 名）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽譜が読めないのでドレミファソと言われてもよくわからない。 ・絃の番号が書いてあったのでわかりやすかった。 ・音符で見るより絃番号でみた方がやりやすい。一と五など絃が違っ 	<p><u>楽譜 1 を選択（9 名）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・番号が大きく書かれていてどの絃を引いたらいいのかが判りやすかった。 ・番号が書いてあって、また唱歌も書いてあって見やすいから。 ・調に関係なく、絃の指定されたところを弾けばよいから。

<p>でも同じ音の場合があるため。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一番大きな理由は、2、3の楽譜の音符がそれぞれどの絃にあたるのかわからないために、数字があることは良いことです。あと最初に見たのが1だったからということもあります。 ・絃の名前を音符ではなく、上から順についている絃番号（一、二、三、四～）で覚えた方がわかりやすいから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調子に慣れていないので、五線紙にオトを書かれても、どの絃を弾けば良いのかとまどってしまふ。 ・拍が数えやすい。 ・最初に見た楽譜だから。 ・楽譜3はリズムが西洋音楽的で、拍にとらわれているような気がして、嫌だった。2は箏の絃とドレミが一致していないので、どの絃を弾いて良いかわからない。
<p><u>楽譜2を選択</u>（1名）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・節回しとドミソを考えながら弾いたので。 ・数のを見ていると、ドミソがわからないまま覚えたのであらためて考えた。 	<p><u>楽譜2を選択</u>（6名）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おさえる絃がわかる。 ・絃の番号、押す、引く、指の番号が書いてあるから。 ・弾く絃の位置が分かるし、音の上下関係が分かる。 ・音の高低やリズムがだいたい頭の中にイメージできる。 ・リズムが分かりやすい。 ・五線譜に慣れているため拍子とり易い。
<p><u>楽譜3を選択</u>（0名）</p>	<p><u>楽譜3を選択</u>（1名）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初にテントンシャンで練習したし、覚えられる範囲の短い節だったので、歌いながら引くほうがやりやすかったから。
<p><u>楽譜使用せず</u>（0名）</p>	<p><u>楽譜使用せず</u>（2名）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・覚えてしまったから。 ・指とか耳で覚えてしまった方が楽だった。カンです。

②考察

Cグループ、Dグループとも楽譜1を使用した学習者が多い。（C：7人、D：9人）特にCグループにおいては8人中7人が、楽譜1を利用している。Dグループにおいても利用は多い。五線譜で練習した者（8人、うち楽譜2すなわち絃名つきを使用した者7人）

や楽譜そのものを使わなかった者（2人）もいた。

まず、楽譜1の利用が多いことについては次のような理由があげられる。

最初に使用したのが楽譜1であった

六段の調・初段を練習するにあたって、まず楽譜1を用いたため、学習者に慣れが

あったと思われる。

五線譜が読めない学習者には、楽譜1の方が利用しやすい

「楽譜が読めないので～」ということでは五線譜を敬遠してしまう学習者がいた。読譜能力が不足している場合、五線譜から得る情報量は極端に減少する。

絃の番号が最大関心事である

練習の際、次にどの絃を弾くか、ということが最大の関心事であるため、絃の番号が大きく記載されている楽譜1がわかりやすい。また、「絃の名前を音符でなく絃番号で覚えた方がわかりやすい」理由は、五線譜の場合表示された音を絃の番号に置き換える作業が必要となるためである。加えて箏の場合、例えば平調子では、一と五の絃は五線譜上では同じために、五線譜や階名で示された場合にどちらの絃を弾いて良いのか混乱をきたす。

拍が数えやすい

楽譜1は、拍毎に四角い枠で示され、視覚的に拍を認識しやすい。

日本的なテンポ感を感じ取ることができる

「楽譜3はリズムが西洋的で、拍にとらわれているような気がして、嫌だった」とあるように、箏曲に見られる拍の伸縮やアナログ的な音程変化を感覚的に楽譜1から感じ取るのではないだろうか。

絶対音感保有者には都合がよい

楽譜2は、実際の音高より長二度ずれているため、絶対音感保有者にとって不都合が生ずる。

一方、楽譜2、3の使用については次のことが言える。

唱歌よりも絃の番号が優先する

五線譜使用者の中では、より多くの学習者が楽譜2を利用する。楽譜2は〈五線譜＋絃名〉、楽譜3は〈五線譜＋唱歌〉であることから、ここでも絃名の情報を優先して受け取ろうとする傾向がうかがえる。唱歌はすでに暗唱してしまっているの、必

要がないものと思われる。

五線譜に馴れている者が使用する

五線譜を使用した者はDグループ、すなわち音楽科の学生であることから、五線譜に関して読譜能力がある場合、積極的な利用が期待される。

五線譜は旋律の動きやリズムがわかる

五線譜からは「音の高低やリズムがだいたい頭の中にイメージできる」「五線譜に馴れているために拍子とりが易い」などの意見がうかがえ、西洋音楽に親しみ、その知識を豊富に持っていれば五線譜による学習も容易であることがわかる。

しかし、この事実は箏学習の際、学習者はまるで譜面台の上に楽譜をのせてピアノを練習する時のように、五線譜からの情報、すなわち（リズムや音の高低）を同時に吸収しながら練習を進めていくことを意味する。唱歌による練習法がこれらの情報（リズムや音の高低）をも含め、前もって音楽を丸ごと暗唱していることを考えれば、五線譜による学習法は西洋音楽の学習システムに変換されることであり、必然的に日本の伝統的な学習法との訣別を生ずることになる。

楽譜を使用しない方法も考えられる

一方、楽譜をまったく使用しなかった者も見られた。彼等は音楽を丸ごと覚えてしまい、耳と指により曲をマスターしよとしていた。楽譜を用いず、耳により師匠の曲を覚えてゆく方法は日本の伝統的な学習法に見られたことであり、箏学習の場合もこの方法を試みる価値がある。

3) 楽譜の効果

以上、箏学習における楽譜の使用に関して次のようにまとめることができる。

- ① 学習者が楽譜に最も期待するのは絃の番号であり、その点で絃番号が中心となっている絃名譜（本研究では楽譜1）が最も有効であった。

五線譜の読譜能力に乏しい学習者、絶対音

感保有者にも使用でき、五線譜と比較し、普遍性を持つ。

- ② 五線譜は読譜能力のある学習者、それに馴れている学習者には、旋律の動きやリズムが容易に認識できるため、効果も期待できる。しかしこの時も絃名は必須であり、絃名も加えた（楽譜2）の使用が望ましい。

また、五線譜の使用は次の点に気をつける必要がある。

—五線譜の音高を絃の番号に置き換える作業が必要である。（この作業は楽譜2のように五線と平行して絃名が記入されていても、同様の作業をしてしまう者がいることがわかった。）

—学習者の中に絶対音感保有者がいる場合は記譜に注意を要する。

—手法に関する情報が不足してしまう。

—五線譜による学習そのものが伝統的な学習法とかけ離れてしまうため、文化に根ざした音楽理解の観点から言えば不適切な学習法となる。従って五線譜による学習法を強いて取り入れるならばそれによって失うものの、補充する内容を考慮する必要がある。

3 異なる学習法の持つ意味

1) 唱歌と階名唱

下図に見られるように、唱歌暗唱による学習法は階名暗唱と比較した場合、より多くの必要な情報を含んでいる。特に手法や音色の変化は、箏曲（日本音楽）の特徴的な部分であり、これらが得られない学習法は日本音楽の重要部分の学習が欠如することになる。

箏演奏に必要な情報の有無（手法の種類は〈六段の調〉初段21拍までを想定）				
			唱歌暗唱	階名暗唱
技術的側面	手法 (運指)	コロリン	○	×
		シャン	○	×
		シャシャ	○	×
		引き色	○	△（音程を変化させることによって）
		後押し	○	△（同上）
	音色変化		○	×
	テンポ		○	○
	リズム		○	○
	旋律		○	○
	フレージング		○	○
	絃の場所		△（ある程度の予想）	×
	指番号		△（同上）	×
認知的側面	覚え易さ		唱歌は覚えやすい	

2) 絃名譜と五線譜

前述したように唱歌を覚えることは、箏演奏に必要な情報を多くまとめて、しかも学習の前段階に得ることであり、楽譜（絃名譜）は、二次的なものとなる。しかし、五線譜の使用は情報の継続的収集を生じ、楽譜は常に情報源となってくる。従って五線譜を用いることは、単に楽譜の相違のみならず学習方法そのもののシステム変換をもたらすことになる。

3) 唱歌・絃名譜を用いた学習

以上の結果から次のことが導き出される。

箏の演奏そのものは、学習者の読譜能力や文化的背景により、唱歌や五線譜など、どのような形の学習法も可能である。しかしながら、箏を通しての音楽文化理解を考慮した場合、唱歌・絃名譜を用いた学習法が最も適切ということができよう。仮に五線譜を用いる場合、学習者に対して十分な補充説明や知的理解が必須となる。

4 演奏上の技術的課題

アンケートの記述及び授業者の観察から、次のことが言える。〔{ } 内学習者の意見例〕

1) 演奏上の困難点

①発音

a 爪の装着

- ・爪を逆に（手の爪と同じように）はめてしまう。
- ・爪が指の太さに合わない。{指が太くすぐにとれてしまう}
- ・馴れないため痛みを伴う。

b 手の位置・形 {指がまがったり、上に跳ね上がったたりしてなかなかきれいな音がでない}

- ・手の甲を龍角につけて弾く。
- ・手のひらが力みすぎて自然なカーブができない。
- ・手が絃から離れすぎる。
- ・指を延ばして力んで弾く。
- ・指を曲げて力んで弾く。

c はじき方

- ・弾いた後、指を上へあげてしまう。

- ・弾いた後、指の他の部分に絃が触れて不必要な音が出る。

d 力の入れ具合 {箏って優雅に見えるけど、そんなもんじゃあないことがわかった。}

- ・絃の張力がかなりあり、思った以上に力が必要である。{結構力がある。}
- ・大きな音が出ない。
- ・力の入れ具合がわからない。{かなり強く弾かなくては行けないが、無理に強く弾くとガシャンと柱を倒してしまう。}

e 手の位置

- ・龍角から離れ、柱の方へずれてくる。

②手法

a 右手の手法 {シャンの弾き方が難しかった。}

- ・かき爪（シャン）の音の数が一つであったり、三つであったりする。
- ・かき爪（シャン）のスピードがないため、音が二つに聞こえる。

b 左手の手法 {ヒ、オが難しい} {絃を引いたり押したりするところが高度だ。}

- ・引き色の音程変化が不十分で下がりきらなかったり、逆に上がってしまったりする。
- ・左手が痛くなる。
- ・押し手の音程変化が不十分である。
 - 圧力がかからない。
 - 柱と左手の距離が長い
 - 途中で左手を離すため、音程がもとにもどる。
 - 押す絃を迷う。

③運指

- ・異なる絃を弾く。
 - 隣の絃まで、弾いてしまう。{一本弾くのによけいな所まで弾いてしまった。}
 - チィトンのトン（9拍目）五絃で弾く。
 - 割り爪（シャジャ）の絃の組み合わせが違ふ。
- ・異なる指で弾く。{指番号が難しい}
 - チィトンのトン（9拍目、17拍目）を親指でとる。
- ・絃の位置がわからない。{はじく所を見つめるのに大変だった。}

— 絃の番号を見つけるのが難しい。

— 絃の番号と音が結び付かない。(Bグループ)

— 指番号と絃番号で混乱する。{指番号と絃の番号が頭の中でごっちゃになってしまおう}

— 階名と指番号・絃番号が混同する。

— 音符と指番号の結び付きが難しい。{音符と指番号を合わせるのに苦労しました。}

・情報の総合的な処理ができない。

— 一度に多数の情報を処理して演奏することは困難である。{音の弾き方とリズムと、ひとつについて考えると他のことがあさっての方へいってしまう。}

— 押し手、引き色の左右の手の連携がうまくいかない。

④ 旋律暗唱の不足

- ・ 旋律を間違えて弾く。
- ・ コロリンの付点が不充分である。

⑤ 音感把握のずれ

- ・ 音組織が違うために、戸惑ってしまう。
{ピアノの音階と違うので戸惑った。}
{普段だとラの下はソだと思ってしまう。}
- ・ 絶対音感保有者が困惑する。{ピアノの音と一音ずつずれていて歌いにくい。五線譜を読むのに読みにくい。} {気がつくとレソラと心の中で歌っていたので困った。}

⑥ 左きき学習者の違和感

- ・ 左ききであるために、やりにくい。{私は左ききで、ギターの左で弾いているのでちょっと弾きにくかった。}

2) 今後の指導への示唆

もとより授業の目的は、箏曲の演奏体験を通して日本の音楽の理解を深めることにあり、演奏の技術を向上させることではない。従って、ここで上記問題点の解決法を考えることが目的ではない。しかしながら、これらの指摘からは短時間の授業実践の中で、考慮すべきことが多く含まれている。以下、今後の指導へ生かすべき点について今回の指導法の反省も踏まえながら考察する。

① 爪に関して

- ・ 少しでも合う爪をつけることができるように、できるだけ多く、また太さも様々なものを用意する。値段はプラスチック製で一組2000円程度である。
- ・ 場合によってはテープ等で固定する。

② 楽器に関して

- ・ 短時間での学習の場合は最初から調絃をしておく。
- ・ 龍角の脇に絃名を記入した紙を貼ったり、基本となる絃(五、八、十)に色をつけ、絃の番号、位置を明確にする。

今回は龍角の脇に紙を貼ったがこれが大変有効に機能した。{箏の横に番号がついていなかったらできなかったと思う。}

③ 旋律の暗唱を十分に行う。

- ・ 今回は、唱歌を唱えることや階名唱が不十分なために、旋律を間違えたり、コロリンのリズムが曖昧であったりする人がわずかであるが見られた。特にコロリンなど、楽譜に記載されているリズムとの相違がある部分は、実際の演奏を優先する。

④ 絶対音感保有者に関して

- ・ 調絃の時と五線譜を使用した場合(今回はB、Cグループ)に絶対音と音符・階名唱とのずれが生ずるものと思われる。学習者にずれを内部処理させて、そのまま指導をすすめることもできるが、ここでは他に次の指導法が考えられる。

— 調絃時は必ずしも相対音高にこだわらず、箏の実際の音高でも指導する。すなわち平調子の場合、〈ミラシドミファラシ〜〉だけではなく、例えば〈レシラシbレミbソラ〜〉という形にする。あるいは、箏の調絃の〈ミラシドミファラシ〜〉を絶対音高として合わせる。(しかしこの場合は指導ビデオ等との音高差が生ずる。)

— 五線譜を使用する場合は、絶対音高の楽譜に書き直したものを用意する。

— 可能な限り唱歌・縦書譜を使用する。

いずれにしてもこの点については、実践をし

ながら詳細な検討が必要である。

⑤ 左きき用の調絃法を試みる。

- ・左きき学習者には箏を半回転させ、左きき用に調絃する。(この点に関して、もともとの絃の張力に差があるため、楽器に対する影響の問題が生ずる不安を感じ、専門家に確認したところ、特に影響は生じないということであった。)

⑥ 奏法のポイントを取り出し、部分的に集中して指導する。

- ・テンやトンの基本的な弾き方を各指で練習する。時間の許すかぎり〈さくら〉など、平易な曲を暗唱し、弾いてみる。
- ・右手手法は、a 合わせ爪(シャン)、b かき爪(シャシャ)、c その応用(シャンテンやシャシャツンなど)、d コロリン、e その応用(シャシャコロリン、コロリチトンなど)を取り上げる。
- ・左手手法は、引き色、押し手を取り上げる。
- ・これらの練習は、演奏法のコツを知らせ曲の理解を深める意味で重視するのであり、〈できる〉ことに執着しない。特に左手手法に関しては注意を要する。

⑦ 奏法のポイントを取り出し、ビデオを作成する。

- ・上記⑥の奏法のポイントをビデオに収録し、指導に生かす。

⑧ 曲を小単位で指導する。

- ・よく出る小フレーズを集中して指導する。
(シャンテン、シャシャツン、シャシャコロリン、コロリチトン、コロリンシャン)
- ・フレーズごとに区切る。
- ・練習範囲は、限られた時間で可能な所までにする。(今回は90分授業の中で、21拍までであったが、ここまでで曲の基本的な要素が含まれている。)

⑨ 指導の手順を修正する。

- ・まず、右手の演奏を中心に行い、その後左手も加える。(A、Bグループでは、右手、左手奏法の手法を立て続けに練習したため、学習者に困惑が見られた。そこでC、Dグ

ループでは、右手のみの練習を行い、そして左手に移行したところ、スムーズな練習ができた。)

5 学習法の改善

これまでの結果をもとに学校教育における音楽の授業において、箏の体験学習法について改善点を示し、授業の基本構造を再提示する。

1) 改善点

ア 基本的な考え方

- ・唱歌と絃名譜を用いて学習する。
- ・唱歌を唱え、暗唱することを重視する。
(楽譜からの情報量を最低限に押える。)
- ・唱歌の機能について説明する。その際、唱歌の持つあいまいさもつけ加える。
- ・〈できる〉ことを第1に考えない。〈感じる〉〈理解する〉ことを重視する。

イ 手順に関して

- ・〈さくら〉〈かぞえうた〉など、平易な曲を取り入れる。
- ・基本奏法(テン・トンなど)、右手手法、左手手法を取りだし、集中して練習する。
- ・曲は小単位(小フレーズ)ごとに練習する。
- ・〈初段〉はまず右手での演奏を中心に練習し、その後左手を加えていく。

2) 授業構造の再掲示

これらの考えを基に、唱歌を中心とした箏学習(グループA)の授業構造を修正して以下に示す。

ア、授業のねらい：唱歌による箏の体験学習をすることにより、箏の音楽の特徴を知ると同時に、日本音楽に対する理解を深める。

イ、教材：〈さくら〉(日本古謡)

〈かぞえうた〉(日本古謡)

〈「六段の調」初段、冒頭より3フレーズ(21拍)〉

ビデオ(「六段の調」初段の演奏及び唱歌)

ウ、授業の流れ

項 目	学 習 活 動	留意点〔教材〕
箏に親しむ 爪の装着 絃名の確認 調絃法の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・爪をつけずに、様々に音を出してみる。 ・爪をつけて音を出してみる。 ・絃の順番、名前を覚える。 ・平調子の調絃を理解する。 ・平調子の響きを感じ取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての箏に親しむことを第1とする。
基本奏法の学習	<ul style="list-style-type: none"> ・基本奏法（親指、人差し指、中指での弾き方）を練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・適当に弾き、響きを楽しむ。 ・テン、トンの唱歌を使用する。
平易な曲の練習	<ul style="list-style-type: none"> ・〈さくら〉〈かぞえうた〉を暗唱する。 ・〈さくら〉〈かぞえうた〉を練習する 	<ul style="list-style-type: none"> ・必ず旋律（or唱歌）を覚えてから弾く。
初段の鑑賞 唱歌の暗唱	<ul style="list-style-type: none"> ・初段を鑑賞する。 ・初段の唱歌を口ずさみながら鑑賞する。 ・唱歌を口ずさみ21拍まで鑑賞する ・ビデオなしで、唱歌を暗唱する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・〔絃名譜〕 ・〔ビデオ〕〔絃名譜〕 ・〔ビデオ〕〔絃名譜〕
コロリンの理解 と練習	<ul style="list-style-type: none"> ・コロリンの意味を知る。 ・コロリンの練習をする。 ・チンテツコーロリンの練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・暗唱を確実に行う。
シャン、シャン の理解と練習	<ul style="list-style-type: none"> ・シャン、シャシャの意味を知る。 ・シャンの練習をする。 ・テーントンシャンを弾く。 ・シャシャの練習をする。 ・シャシャコーロリンを弾く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いくつかのパターンを行う。 ・〔ビデオ〕 ・必ず唱歌を唱える。 ・左手はまだ練習しない。
右手だけで練習 ・フレーズごと ・通した練習	<ul style="list-style-type: none"> ・右手だけで、フレーズごとに練習する。 ―テーントンシャン ―シャシャコーロリチトン ―チンテツコーロリチトン ・右手だけで通して弾く 	<ul style="list-style-type: none"> ・左手は軽く柱の方に添えておく。 ・唱歌を唱える。
引き色の理解と 練習	<ul style="list-style-type: none"> ・引き色の奏法を知る。 ・引き色の練習をする。 ・冒頭のテーントンシャンを弾く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・〔ビデオ〕 ・できることを第1としない。
押し手の理解と 練習	<ul style="list-style-type: none"> ・押し手の奏法を知る。 ・あと押しの練習をする。 ・チイトンを弾く。 ・シャシャコーロリチイトンを弾く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・〔ビデオ〕 ・できることを第1としない。
唱歌の意味の整 理	<ul style="list-style-type: none"> ・次のことが唱歌によりわかることを知る。 ―コロリン、シャン、シャシャ、押し手、引き色などの手法。 ―リズム、テンポ、フレージング。 ・唱歌は、絃の区別や音高に関して、あいまいな点もあることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏する際、唱歌に頼ってよい点と不明確な点を伝える。 ・〔絃名譜〕
総合練習	<ul style="list-style-type: none"> ・唱歌を唱えながら課題部分を通して練習する。 ・全員で合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・〔絃名譜〕

おわりに

本研究では、音楽科の授業を想定し、初心者の箏の演奏体験を通して具体的な方法論を示そうとしてきた。それは、五線譜による学習システムの中で育った現代の学習者に対して、伝統的な学習法をどのような形で取り入れていけるかということでもあった。

その結果、箏学習において唱歌は有効に機能することが明らかになった。同時に問題点も指摘された。また楽譜に関しては五線譜は便利ではあるもの、それを使用することは、異なる学習体系への移行を意味すること。従って絃名譜を生かし、唱歌を用いた学習が効果的であることもわかった。また箏を体験する際の初心者の

技術的な課題も明らかになり、加えてこれらをもとに、実践場面を想定し学習法を再考し提案することができた。

今後はより継続的な学習を観察する中で、学習法の差による学習者の音楽のとらえ方の違いを明らかにしていきたい。

注

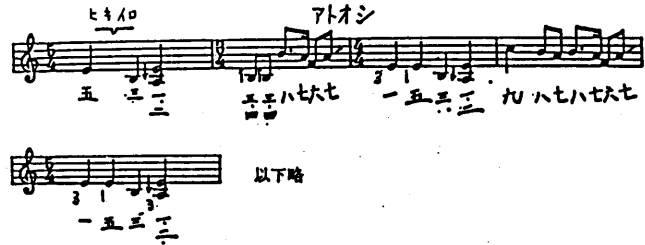
- 1 楽譜にはチとかしが記載されていないが、実際歌った時には音程変化のためチィとなる。
- 2 安藤政輝『生田流の箏曲』講談社 1992年 p.198
- 3 吉川英史『日本音楽の美的研究』音楽之友社 1984年 p.276

資料1 *邦楽社による

チ	九	六段の調 平調子	右
ソ			左
テ	八		右
ツ	七		右
コ	八		右
ロ	七		右
リ	六		右
チ	七		右
ト	一 ³		右
ソ			左
テ	五	五 偏 調ニ	右
ソ			左
テ	五	ピ○	右
ソ		ソ	左
ト	三	ト 三	右
ソ		ソ	左
シヤ	一 ^ニ	シヤ 一 ^ニ	右
ソ		ソ	左
	○	○	右
			左
以下略		シヤ 三 ^四 ₂	右
		シヤ 一 ³	左
		コ 八	右
		ロ 七	左
		リ 六	右
		チ 七	左
		ト 一 ³	右
		ソ	左
		テ 五	右
		ソ	左
		ト 三	右
		ソ	左
		シヤ 一 ^ニ	右
		ソ	左

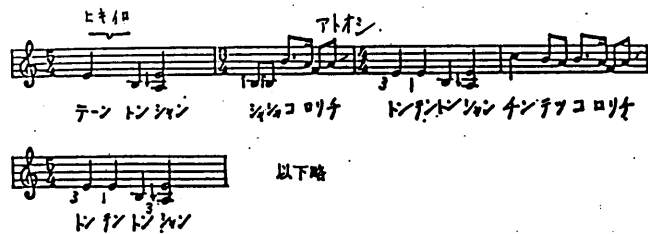
資料2

六段の調



資料3

六段の調



*資料2、3の五線譜への表記は次の資料による

藤井凡大編「やさしい合奏曲集 日本の小箱」ドレミ楽譜出版社 昭和53年 p.46

資料4：学習者へのアンケート

アンケート①：Aグループ

- 1 箏の経験（ある なし）
- 2 唱歌は役にたちましたか？（役にたった 役にたたない）
- 3 2の理由を詳しく書きなさい。
- 4 その他感想（箇条書きでできるだけ詳しく書きなさい。）

アンケート②：Bグループ

- 1 箏の経験（ある なし）
- 2 箏を弾く時に頼りにしたのは何ですか。最も頼りにしたものを次から選びなさい。複数ある人は順位をつけなさい。
（階名唱 絃番号 音符 指番号 その他）
- 3 その他感想（箇条書きでできるだけ詳しく書きなさい。）

アンケート③：C、Dグループ

- 1 箏の経験（ある なし）
- 2 今日の最後の一人で練習で最終的にあなたが使用した楽譜の番号を一つ選択しなさい。（1 2 3）
- 3 2の理由を詳しく書きなさい。
- 4 唱歌は役にたちましたか？（役にたった 役にたたない）
- 5 4の理由を詳しく書きなさい。
- 6 その他感想（箇条書きでできるだけ詳しく書きなさい。）

資料5：授業の詳細

Aグループ（唱歌クラス）	Bグループ（五線譜クラス）	Cグループ（唱歌+五線譜クラス：小教課程）	Dグループ（唱歌+五線譜クラス：音楽科）
ねらいの確認 爪をつけずに音出し 調弦の確認 爪の装着 紐着確認 爪をつけて音出し ・巾〜（1の指） ・巾〜（2の指） ・巾〜（流し爪）	爪をつけずに音出し 爪の装着 爪をつけて任意の音出し 紐着確認 調弦の確認 爪をつけて音出し ・巾〜（1の指） ・巾〜（流し爪） ・巾〜（2の指）	爪をつけずに音出し 爪の装着 爪をつけて任意の音出し 紐着確認 調弦の確認 爪をつけて音出し ・巾〜 ・巾〜 ・巾〜（2の指）	爪の装着 調弦の確認 紐着確認 爪をつけて音出し ・巾〜 ・巾〜
基本奏法の学習（唱歌の使用） ・爪の使用箇所 ・弾いた後の爪の位置 ・手、指の形 ・音の大きさ ・基本奏法練習	基本奏法の学習（階名の使用） ・爪の使用箇所 ・弾いた後の爪の位置 ・手、指の形 ・音の大きさ ・基本奏法練習	基本奏法の学習（階名、唱歌の混合使用） ・爪の使用箇所 ・弾いた後の爪の位置 ・手、指の形 ・音の大きさ ・基本奏法練習	基本奏法の学習（階名、唱歌の混合使用） ・弾いた後の爪の位置 ・爪の使用箇所 ・手、指の形 ・音の大きさ ・基本奏法練習
<さくら>の練習 ・唱歌の吟唱（縦書き譜） ・<さくら>の練習	<さくら>の練習 ・階名の吟唱（階名唱）（五線譜） ・<さくら>の練習 ねらいの確認	<さくら>の練習 ・階名の吟唱（階名唱）（五線譜） ・<さくら>の練習 ・縦書き譜による唱歌の吟唱 ・縦書き譜による練習	<さくら>の練習 ・階名の吟唱（階名唱）（五線譜） ・<さくら>の練習 ・縦書き譜による唱歌の吟唱 ・縦書き譜による練習 ねらいの確認
<六段の調>初段の鑑賞 ・初段の鑑賞	<六段の調>初段の鑑賞 ・初段の鑑賞	<六段の調>初段の鑑賞（五線譜） ・初段の鑑賞 ねらいの確認	<六段の調>初段の鑑賞（縦書き譜） ・読譜の指導
唱歌を覚える ・唱歌を口ずさみ鑑賞 （演奏+唱歌ビデオ） ・唱歌を口ずさみ21拍まで鑑賞 （演奏+唱歌ビデオ） ・ビデオなしで唱歌の吟唱 ・「引き色、押し手」の理解 ・ビデオなしで唱歌を歌う。（2回）	旋律を覚える ・階名を口ずさみ鑑賞 （演奏ビデオ） ・五線譜を読めない学生に 階名が書いてある補助プ リント配布 ・階名唱をしながら21拍まで鑑賞 （演奏ビデオ） ・ビデオなしで階名唱を吟唱	唱歌を覚える ・唱歌を口ずさみ鑑賞 （演奏+唱歌ビデオ） ・唱歌を口ずさみ21拍まで鑑賞 （演奏+唱歌ビデオ） ・ビデオなしで唱歌の吟唱	唱歌を覚える ・唱歌を口ずさみ鑑賞 （演奏+唱歌ビデオ） ・唱歌を口ずさみ21拍まで鑑賞 （演奏+唱歌ビデオ） ・ビデオなしで唱歌の吟唱
コロリンの理解と練習 ・コロリンの説明 ・コロリンの練習（八―七―六の絃で） ・チンテツコロリンの練習 シャン、シャシャの理解と練習 ・シャンの練習 ・シャシャコロリンの練習	コロリンの理解と練習 ・上から順番に弾く奏法の説明 ・シーラファー（la-ta-ta）の練習 ・Fajita（ファジタ）の練習 シャン、シャシャの理解と練習 ・二絃を同時に弾く奏法の説明 ・シャン、シャシャの練習 （階名及びタンタンを使用） ・チンテツシャンの練習 ・チンテツシャの練習	コロリンの理解と練習 ・コロリンの説明 ・コロリンの練習（八―七―六の絃で） ・チンテツコロリンの練習 シャン、シャシャの理解と練習 ・シャンの練習 ・シャシャの練習 ・シャシャコロリンの練習	シャン、シャシャの理解と練習 ・シャンの練習 ・シャシャの練習 ・チンテツシャンの練習 コロリンの理解と練習 ・コロリンの説明 ・コロリンの練習（八―七―六の絃で） ・チンテツコロリンの練習 ・シャシャコロリンの練習
引き色の理解と練習 ・最初のチーン ・チンテツシャンの練習 ・シャシャコロリンの練習 ・コロリティンの練習	引き色の理解と練習 ・最初のミ（チーン）の練習 ・ミッ（チンテツシャン）の練習	・チンテツシャンの練習	
		押し手、引き色なしで21拍まで練習 （右手のみの練習）	押し手、引き色なしで21拍まで練習 （右手のみの練習）
押し手の理解と練習	押し手の理解と練習	押し手の理解と練習 引き色の理解と練習	引き色の理解と練習 押し手の理解と練習
総合練習	総合練習	総合練習 五線譜の配布（読譜の説明） ・階名唱をしながら21拍まで吟唱 ・五線譜による練習 五線譜+唱歌の楽譜の配布 自分の好きな楽譜を使用して練習 総合練習	総合練習 五線譜の配布（読譜の説明） ・五線譜による練習 五線譜+唱歌の楽譜の配布 ・五線譜+唱歌の楽譜により練習 自分の好きな楽譜を使用して練習 総合練習
全体での合わせ	全体での合わせ	全体での合わせ	全体での合わせ
終了	終了	終了	終了